

鬼っ子凜ちゃんの冒険・序章篇

作・民富田智明

東京工芸大学芸術学部映像学科

シナリオ演習 課題作品（2007年）

人物

凜……鬼つ子

牙吉……山犬

鎌侗魔……怪物

ナレーション

ナレーション「昔々、とある山奥に、凜という鬼

子が住んでいました。

凜は、大神の牙吉と楽しく暮らしていました。

だけど、今は好奇心旺盛な年頃。

凜はいつも夢見ていました。

未だ行ったことのない、外の世界への小さな大

冒険を……」

○タイトル

○凜と牙吉の家・外観（夜）

なだらかな地面に建つ簡素な造りのテン

ト状の家。

○凜と牙吉の家・内部（夜）

提灯が吊り下げられ、室内を照らしている。

暖かそうな、ふっくらした布団に包まれ、

横になっている凧。

凧に寄り添うようにして身体を休めている

牙吉。

凧「ねえ、牙吉」

牙吉「ん？」

凧「山から出たことある？」

牙吉「いや、ないけど」

凧「外の世界には何があるのかな」

牙吉「さあね」

凧「行ってみようか？」

牙吉「気になるの？」

凧「うん」

牙吉「じゃあ、明日ちよつと下界探検でもしてみ

る？」

凧「うん！一緒に行こう！」

牙吉「よし。ならよく眠っておけよ」

凧「うん！おやすみ、牙吉！」

凧と牙吉、目を閉じて眠りにつく。

○凧と牙吉の家・内部（早朝）

牙吉「おい、凧！朝だぞ！」

牙吉がワンワン吠え立てる。

凜「ふう、まだ眠いよ」

凜、布団を頭からかぶる。

牙吉、凜の布団をくわえて引き剥がす。

凜「きゃ！お布団返して」

牙吉「だめだ。さっさと起きろ」

凜「牙吉のばかあ」

牙吉「生憎だけど、おいらは馬でも鹿でもないぜ」

凜「むっ、いいもん！凜はお布団なくても寝れる

もん！」

そっぽを向く凜。

牙吉「あっそう。じゃあ、下界探検はしなくてい

いんだな？おいら一人で遊んでくるから、留守

番よろしく！」

牙吉、テントから出て行く。

○家の前の山道

牙吉がトコトコ歩いている。

凜「牙吉」

振り向く牙吉。

後ろから、支度を整えた凜が追いかけてくる。

腰に大刀を差し、背中に鉄砲を担いでいる。

凜「もお、牙吉ったら、置いてかないでよお」

牙吉「本当に凜はお寝坊さんだな」

凜「えへへ」

無邪気に微笑する凜。

○山道

陽気に歌いながら歩いている凜。

そんな無邪気な凜を、微笑ましく見ながら

歩く牙吉。

坂道、トンネル、草原、一本橋、でこぼこ

砂利道を超えていく二人。

○山の麓・山道口

凜と牙吉、歩き疲れてへろへろ状態で山道

を下りきる。

凜「疲れた〜。もうだめえ〜」

牙吉「山下りがこんなきついとは……」

凜「牙吉」

牙吉「ん？」

凜「あそこで一休みしよ！」

凜が指差す方向に、一軒の茶屋がある。

牙吉「賛成！」

茶屋に向かう、凜と牙吉。

○山の麓の茶屋

凜と牙吉が暖簾をくぐると、とてつもない

異臭が鼻を刺激する。

牙吉「こ、これは！」

凜「な、何これ……！」

凜と牙吉の目前には、恐らく店主であろう、
惨たらしく散らばった腐乱死体。

脳髓や臓物が引きずり出され、眼球と歯が
飛び散り、身体の一部が肉塊と化している。
そして、その肉塊には、蛆が湧き、蠅が飛
び交っている。

この地獄絵図に、思わず絶句する。

血の気がひく凜。

凜「ううっ」

体がくらくたときて、口を手で押さえながら、

涙目に外に出る凜。

牙吉「り、凜？」

○茶屋脇の草むら

凜が走ってきて物陰にうずくまり、耐え切

れず嘔吐する。

牙吉が駆け寄る。

牙吉「凜、大丈夫か？」

辛そうに咳き込み、泣き喘ぐ凜。

凜「牙吉……！」

牙吉に抱き寄る。

牙吉「無理もない……！」

凜「酷いよ。酷すぎる……。一体、何なの？」

牙吉「おいらにもわからないよ……。けど、何か
がまずい予感がする。すぐに帰ろう！」

凜「うん……」

涙を拭いて立ち上がる凜。

牙吉に導かれ、力が抜けた感じで歩き出す。

その時、どこからともなく……

謎の声「待ちな！」

声に反応して、あたりを見回す凜と牙吉。

小高い木の上に立っている怪物。

怪物「とお〜！」

木の上からジャンプし、凜と牙吉の前に着
地する。

体長の3倍はありそうな、長い触角。

頭部をうなだれた、猫背のような体型。

ふくれあがった斑模様の腹。

背中が高く盛り上がり、やや左右から扁平
になっている。

腕には鋭利な鎌状の爪。

全体的に気味の悪い風貌。

凜「ひえっ！お、お化けえ〜！」

牙吉の後ろで怯える凜。

凜の前にズイっと出て盾になる牙吉。

牙吉「何だ、お前！」

怪物「俺の名は鎌恫魔！この辺じゃあ、ちよつと

は名が知れた妖怪よ！」

牙吉「その爪……まさか、お前がその死体を？」

鎌恫魔「ご名答」

牙吉「どうして獲物を食べない？」

鎌恫魔「別に食べるために殺したわけじゃねえ」

牙吉「な！だったら何のために……」

鎌恫魔「理由なんかねえ。俺は生き物をバラすの

が趣味なんだよ」

牙吉「意味もなく殺生を？本気か？」

鎌恫魔「本気だ」

牙吉「外道なやつめ！」

鎌恫魔「外道で結構。貴様等見かけん顔だな。お

い、その小娘！俺の遊び相手になってもらお

うか！」

爪を振り上げ、凜に襲いかかる。

凜「い、いやあ！」

牙吉「危ない！」

とっさに凜を突き飛ばす牙吉。

凜「きゃあ！」

尻餅をつく凜。

牙吉、凜の身代わりになって斬りつけられる。

牙吉「ぐわっ！」

凜「ぎ、牙吉！」

傷口から血が流れる。

牙吉「このくらい平気だい！」

堪えて凜の前に立ち続ける。

鎌恫魔「ほう。忠犬というやつか！見上げた根性だな」

凜「よくも牙吉を！許さないんだから！」

鉄砲を構え、鎌恫魔に向ける。

しかし、恐怖で手が震えていて、狙いが定まらない。

鎌恫魔「おいおい、お嬢ちゃんよ！そんなに震えていちゃあ、鉄砲ってもんは当たらないぜ！」

凜「う、うるさい、化け物！」

鎌恫魔「鬼子に化け物呼ばわりされたくねえなあ」

凜に近づく鎌恫魔。

凜「こ、来ないで！」

凜、発砲する。

しかし、弾丸は鎌恫魔をそれてしまう。

鎌恫魔「あくあ。外しちゃった。へタクソ！」

爪を振り上げる鎌恫魔。

牙吉「凜に手を出すな！」

鎌恫魔の腕に飛びつき、食らいつく牙吉。

鎌恫魔「ええい、邪魔だ！」

牙吉を振りほどいて吹っ飛ばし、木に叩き

つける。

牙吉「ぐはっ！」

地面に落ちてぐったりする牙吉。

凜「牙吉い！」

鎌恫魔「犬の心配より、自分の心配をしな！」

鎌恫魔の爪が、凜に迫る。

凜「い、いや！」

焦り気味に発砲する。

鎌恫魔の胴体に当たる。

しかし、まったくびくともしない鎌恫魔。

凜「な！どうして？」

鎌恫魔「言い忘れていたが、俺の外骨格は、鉛玉程度では傷つかないぜ！残念だったな！」

爪を振り下ろして鉄砲を叩き落とし、凜の

頬を切り裂く。

凜「いぎっ！」

傷口から血が流れ出す。

激痛が走り、とっさに傷口に手を当てる。

指の間から血がにじむ。

目から涙が流れ出る。

凜「うえくん、痛いよお〜！」

凜、泣き出してしまう。

鎌恫魔「いいぞ、もっと泣き喚け！」

鎌恫魔、容赦なく凜を足蹴にする。

そして、地面に転んだ凧を踏みつけて痛めつける。

凧、激しい苦痛に抵抗もできない。

悲痛な呻き声を発する凧。

鎌恫魔「はあはあ、いい！いいぞ！その調子だ！」

凧を痛めつけながら、自己陶醉する鎌恫魔。

牙吉「やめろ！やめてくれ！」

よろめきながら、力を振り絞って立ち上がる牙吉。

牙吉「うわああ！」

無我夢中で鎌恫魔に飛びかかる。

そして首筋を思い切り噛み付く。

鎌恫魔「このクソ犬め！離せ！」

牙吉「嫌だ！」

牙吉の鋭い牙が、鎌恫魔の首に食い込んでいく。

鎌恫魔「く、どけ！殺すぞ！」

牙吉「大好きな凧のためなら本望だ！」

牙吉の声に反応して、ふと我を取り戻す凧。

さらに顎に力を入れる牙吉。

牙が皮膜を突き破り、青緑色の血が噴出する。

鎌恫魔「ぐおお、離せ！離せ！」

鎌恫魔、牙吉の背中を爪でかきむしる。

背中がズタズタになっていく。

それでも嘔み付き続ける牙吉。

だが、ドクドク血が流れていき、力尽きて
しまう。

鎌侗魔から顎が外れ、力なく地面に崩れる。

凜「き、牙吉！」

凜が駆け寄り、泣きながら牙吉を抱き寄せ
る。

凜「バカバカばかあ！牙吉のばかあ！」

牙吉「へへ……おいらは馬でも鹿でも……ぐは

あっ！」

血を吐く牙吉。

凜「バカあ！何冗談言ってるのよ！」

牙吉「凜……逃げて！」

凜「いや、いやだよ……」

牙吉「逃げるんだ……おいらはもう……」

凜「いや！一人ぼっちはいやだよ！」

牙吉「凜、大好きだよ……ずっとずっと一緒にい

かったよ……」

凜「バカ……これからもずっと一緒だよ……だから……ね？」

凜に抱かれながら、息を引き取る牙吉。

凜「……牙吉のバカあああ！」

牙吉を抱きしめ、泣き叫ぶ凜。

鎌侗魔「クソ犬め、くたばったようだな！」

凜「(ぼそぼそ声で) 許さない……」

鎌恟魔「あ？」

凜、牙吉をそっと地面に寝かせ、ゆっくり立ち上がる。

凜「お前を絶対に許さない！」

凜、腰の刀を抜く。

激しい憎悪の目を鎌恟魔に向ける。

恐ろしいほどの殺気を感じる鎌恟魔。

鎌恟魔「こ、この邪気……さっきまでの小娘にはなかったぞ！まるで羅刹鬼そのもの！」

凜「死ね！」

鎌恟魔「や、やめろおおお！」

一瞬にして鎌恟魔の首が飛び、血が噴出して惨死する。

凜「はあ、はあ、はあ」

凜、力が抜けたように膝をつき、倒れこんでしまう。

そして、眠るように意識が遠くなっていく。

○凜と牙吉の家・内部（早朝）

牙吉「おい、凜！朝だぞ！」

牙吉がワンワン吠え立てる。

凜「うくん……え？牙吉？」

気がついて飛び起きる凜。

凜「わあ！牙吉だあ〜！」

凜、牙吉をぎゅっと抱きしめる。

牙吉「何だよ、朝から気持ち悪いなあ……あれ？」

凜の目から、涙。

牙吉「凜、どうしたの？」

凜「あのね、怖い夢を見たの……」

牙吉「ハハハ。夢を見て泣くなんて、まだまだ子

供だな！」

凜「牙吉のバカ……ううん、大好き！」

牙吉「な……いきなり何言って……」

凜「牙吉、ずっとずっと一緒だよ？」

凜、牙吉を見つめる。

牙吉、照れくさくて顔をそらす。

牙吉「……ほら、早く下界探検に行こうぜ！」

凜「い、いやあ！鎌侗魔に襲われる〜！」

ナレーション「凜と牙吉の本当の冒険は、まだま

だ先のようにです。おしまい」

終

(2000字詰め原稿用紙換算30枚)